

# 朝鮮

## 人生の起伏

山形県 佐藤 寅 蔵

私は、東北の名峰、鳥海山の山麓にある貧しい農家で生まれ、家庭は貧しくとも両親の温かい愛情で育てられ、大正十年四月、学区地元の小学校へ入学した。そして二学年に進級をして間もなく、父は病死した。その後母の手で育てられ、義務教育の六年生は無事卒業することができた。高等科の学年は当時小学校になく町で一番大きい学校へ移り、昭和二年四月に高等科へ入学し、昭和四年三月高等科二年生を卒業したのである。当時、田舎の寒村では小学校卒業と同時に、男

は農家の下男奉公に、女は子守又は女中奉公に他家へ出され、高等科へ進学できる人は大変幸せな人であった。

高等科を卒業したときは、日本経済は大不況に遭遇し、日本全国に不況の大嵐が吹き荒れていた。官公吏の減俸、社会企業の倒産が続出し、これに伴い大都会では失業者が街頭に溢れていた。特に東北地方では、この不況に輪をかけるように冷害による凶作が続き、農村は苦況と疲弊のどん底で喘いでいた。多くの農家では、地主へ年貢米を納めると自分の家族で食べる米がない悲惨な状況であった。また小学校では欠食の生徒が多数続出し、一方ではかわいい我が娘を花柳界へ身売りさせる者が続出していたことが今でも記憶に残っている。

私はこのような時代に社会へ放り出され、やむなく生家で農家の手伝いをする事となった。しかし私は農業で生計を立てる意志は全くなかった。このような農村の現状では、役所勤務が一番の得策と考えたが、しかしながら、私の学歴では余りにも遠大な希望であり、実現可能な仕事を選択することとし、鉄道員になることが私の第一の希望であった。

昭和七年ごろ、山形運輸事務所の鉄道員採用試験を受験したところ幸いにも学科試験には合格したが、第二次試験では不合格となり、完全に青春の夢が消え去った。

当時、私は家庭生活が困窮のため、受験勉強するにも参考書を購入する金がなかったのが事実である。

その年の秋ごろ、偶然にも酒田駅勤務のSさんと知り合い、友人となることができた。Sさんへ事情を話したところ、私の境遇に同情され、受験用参考書をお願いいただき、Sさん心から感謝したのである。Sさんからも今は、大不況で鉄道職員採用試験も受験者が多く、採用人員がないため至難ではあるが、一層頑張るよう

激励されたのである。

昭和十年の春ごろ、数年前から朝鮮（現北朝鮮地方）に出向中の恩師・大場先生が帰国された。大場先生はその当時、平安南道で公立普通学校の校長在職中であった。私たち同級生は心ばかりの歓迎会を催したのである。その席で先生へ朝鮮鉄道局鉄道員の希望を打ち明け相談をし、私はそのとき、朝鮮に渡る固い決意をしたのである。

先生は帰鮮後早速、地元の駅で調査し、受験に関係することを詳細にわたり知らせてくださった。内容は朝鮮鉄道局においても、各鉄道事務所で年一回程度採用試験を行うが、数人採用に受験者が多数おり、かなりの難関であるとのことであった。それからしばらくして、その年の採用試験期日の発表があり、先生から「すぐ渡鮮されたし」との連絡をいただいた。私はすぐ渡鮮しなかったが、肝心の旅費がなく渡鮮ができず断念せざるを得なかった。

翌年の昭和十一年二月、旅費の一部を親類から借出し、勇躍渡鮮したのである。渡鮮後は就職するまでの

長い間、先生の所に居候をし、受験準備をしたのである。

待ちに待った採用試験が三月中旬ごろ実施され受験したが、発表まで毎日心配でならなかった。三月二十四日、地元の万城駅職員が自転車で合格採用通知書を届けにきてくれた。私は、その合格通知書を手にし、無意識に躍り上がり喜んだことが今でも忘れることができない。合格通知書に、「三月二十五日慈山駅へ赴任せよ」とあったから、また別紙に万城駅長名で、赴任用の鉄道無賃乗車証は万城駅で発行するとあった。

その日は、学校の卒業式準備のため、先生は学校へ出勤し不在だったので、私は走って先生に合格したことを伝えましたところ、先生は非常に喜んでくださり、その晩は先生ご夫妻に盛大な送別会を催していただいた。翌二十五日万城駅を出発し、平元線の平安南道慈山駅に到着したのは夕刻であった。当夜は駅長さん宅で夕食を御馳走になり、翌日から隣の官舎で起居することとなった。

昭和十一年三月二十八日、慈山駅試備駅手として採

用され、実社会へ念願の第一歩を踏み出したのである。試備期間も無事終わり、同年六月十一日「朝鮮総督府鉄道局備人慈山駅駅手を命ずる。日給一円十銭を給する」の辞令を手にしたときの心境は筆舌に表すことができない喜びであった。

ただただ先生ご一家並びに友人らのお陰であり、私は心から感謝の念でいっぱいであった。

当時、慈山駅は駅長の田畑常親氏と私だけが日本人で、残り四人は朝鮮人の職員で大先輩であった。私の仕事は雑務として、便所掃除、事務室、待合室の清掃などで、私の人生のスタートとなったのである。勤務者は全員が日勤で、駅長が非番のときは、隣の順川駅から代務助役が来ていた。一年間は鉄道法規の勉強と実務に追われ、無我夢中で過ごした。二年目からは幾分余裕もでき、庶務、人事関係法規を勉強することができた。職制上、備人と雇員との身分上の格差、特に給与面、制服など、あらゆる面で大きく異なることが分かった。備人の身分から雇員となるには、鉄道講習所又は雇員資格試験に合格する道しかなかった。私も

雇員に挑戦の希望がわいた。三年目の二月ごろ鉄道職務講習を受験したが、完全に失敗を期した。昭和十四年の雇員資格試験を受験し、幸いにも合格の栄を得て、憧れの雇員に昇任することができた。

傭人の固い小倉服から、柔らかい「サージ」の制服へ衣替えし、襟には二個の襟章を付けることができた喜びは、格別なる誇りを感じたのである。

朝鮮鉄道局路線は、朝鮮十三道に交通網を張り、朝鮮半島の産業経済、資源開発、交通輸送、文化発展などの向上のため、あらゆる面において大きな役割を果たしていた。南は日本国内より関釜連絡船で接続し、一方北は南満州鉄道会社、満州鉄路総局線と接続し、アジア大陸の発展に大きく、かつ重要な使命と、殊に京釜線、京義線においては、日鮮満を結ぶ大動脈でもあった。私はこのような大役を担う、鉄道局員として就職できたことを何よりの誇りと責任を感じたのである。

その後は黙々と職務に勉勵し、いろいろな試験に挑戦し、幸いにも合格することができ、後に、平壤列車

区、順安駅などで勤務することとなった。当時は戦時下で、鉄道ダイヤは、旅客、貨物輸送のほか、連日、軍事列車の運行で業務は特別多忙を極めていた。

昭和十六年ごろから、日本も戦争地域を次第に拡大し、一段と戦争の熾烈さが増大してきた。陸軍軍部では、ひそかに隣駅付近の盆地へ、平壤陸軍兵器補給廠の分廠に当たる填薬所設置の計画をし、昭和十八年当初から業務開始することとなっていた。この施設は主として、満州・北支・中支方面部隊への弾薬補給の円滑を期するため重要な施設であった。施設の名称は、平壤陸軍兵器補給廠斧山面填薬所」という長い名称であった。

その当時私は、填薬所の某将校と、その筋の某氏と知り合いお付き合いをしていた。

ある日、両氏より填薬所で輸送に精通している人は是非欲しいと私に懇願された。私は非常に迷ったが妻とも相談し熟慮の末、填薬所へ軍属として転出することを決意し、昭和十八年一月赴任した。

当初の所長は、陸軍兵技中佐の松村久氏であった。

填薬所の施設は間里駅より少し離れた場所ので四方が小高い丘に囲まれ、普段は、鉄道で通っても人目に付かぬ所であった。そこには朝鮮人の田畑もかなりあり、田畑への出入りは、当填薬所発行の門鑑で出入りし、耕作していた。中央部に本部があり、ほかに各係事務室と多数の倉庫設置があった。輸送係の事務室は鉄道引込線の近くにあった。

担当業務は、輸送係として再出発することとなった。業務内容は、弾薬の発送書、受領書の受理計算と貨車の発送積付状況の確認等が主務で、毎日鉄道ホームに出ることが多かった。しかし鉄道業務と異なり徹夜勤務はなく、体は楽な勤務であった。

戦局が日増しに激しくなるにつれ、弾薬輸送も一段と繁忙を極めてきた。業務が多忙になるに伴い、月日の流れるのは早いもので、昭和二十年の旧盆の月に入っていた。

昭和二十年八月十五日午後、事務所本部から、至急本部前広場へ全員集合の命令が各職場へ出された。私はそのとき、何か不吉な予感を抱きながら急ぎ集合し

た。

全員が集合したとき、所長の松村中佐が壇上に入り、いつもより張りのない声で、「先ほど、ラジオ放送で天皇陛下が、終戦になった旨を、日本国民にお伝えになったことを全員に伝達する。しかし、いまだに本廠からは詳細なる命令通達には至っていない。命令のあるまで皆は各職場に帰り、作業を続行せよ」との命令であった。

私はそのとき、後方から不意に鉄棒で頭を殴られたような強いショックを受けた。職場ではだれ一人終戦について口にする者はいなかった。ただただ深刻な顔付きであった。夕刻退庁時の点呼する時点で、「明日からは一切の業務を停止する」と命令伝達があったと記憶している。

日本人の信じた今までの神話が一瞬にして吹き飛び、この後日本人のだれもが経験したことのない悲惨な体験と苦難の道を歩むこととなった。まさに天地が転倒したのだ。三日後解散式が行われ、私たち日本人だけは、ソ連軍の引継関係調書作成のため、いつもの通り

出勤した。

八月十六日か十七日だったか、間里駅長さんから私あて秘密の連絡があり、本日の釜山行き夜行列車が最後の運行となるため、南鮮への脱出が得策と思うがいかがかと、大変有り難い連絡があった。早速妻と相談したが、当時私は、一部官舎地区の世話役をしており、今、自分の家族だけが脱出することは良心的にもできないと判断し、官舎の皆さんと行動を共にすることを決意し、間里駅長さんにはこの旨を伝え、ご厚意に対し心から感謝をいたしましたのである。

家族には急に、約五十七キロほど離れた平壤陸軍部隊のあった、平壤府秋乙地区への移動集結命令があり、官舎地区はてんやわんやの大騒ぎで移動して行った。

それから間もなく、平壤府近辺をはじめ、所々で朝鮮人の暴動が起き、日本人の財産などの略奪騒ぎが起こったと聞いた。いつの間にか道路路端の電柱、至る所の塀などに、金日成、万歳のポスターがはられ、建国の準備と分かった。

私たちは引継関係調書完了後、早速家族の集結地へ

移動し、途中無事家族と合流し、ようやく安堵の胸を撫でおろしたのである。

その後の日常生活は、一軒の宿舎に数戸世帯を組合せ、集団生活をする事となった。私の住居は八世帯、人数三十三人の組合せとなり、その宿舎の責任者には私が指名された。

八月二十五日ごろから、ソ連軍が秋乙地区へ続々と進駐し、以前の平壤部隊の兵舎は、完全にソ連軍の兵舎となり一変してしまった。

私は九月の初めごろから、毎日ソ連軍、又は朝鮮保安隊の使役に狩り出された。使役から帰宅時には、使役の代償として黒パンの屑をもらい受け、家族たちの食糧としたのである。黒パンも最初はちよつと酸っぱいような味であったが、次第に慣れると苦にもならなくなり、子供たちは喜んで食べた。

九月中旬のある朝、ソ連兵が武装し、宿舎地区を完全に包囲し、宿舎地区から外への出入りを禁止してしまった。私は何か不吉な予感が閃いた。午前八時ごろ、ソ連兵二人が朝鮮人の通訳一人を従え、「日本人で満

十六歳以上五十歳までの男は、少し厚着をし、宿舍地区前大道路に至急集合せよ、もし隠れたり逃亡を企てたりした者はその場で射殺する」と言った。私の宿舎には該当者が七人いたが、取り急ぎ身支度をし、ソ連兵から銃を突き付けられながら指定場所へ連行された。集合の終わったところで、ソ連兵から嚴重に監視されながらソ連軍戦車部隊と思われる兵舎広場へ連行された。連行者は約二百人くらいいたと思う。

集合の終わったところで、ソ連軍の将校が壇上に上がり、流暢な日本語で、「日本人のお前たちを日本へ帰国させるための準備で、身上調査を行う。終戦により兵隊から帰ってきた者又は憲兵、警察官、裁判官などの経歴のある方は、特に早く調査をし帰宅させるから正直に挙手をするように」と言った。馬鹿正直の者は早速挙手する者が数人いた。それはソ連軍の大きな畏であった。

私が取調べを受けたのは最後の方で夜も大分遅い時刻であった。調査室に連行され、室内には将校二人と通訳の三人がいた。最初は、住所、氏名、年齢、敗戦

までの職業と兵役関係などの尋問を受けたので、職業は鉄道員であると答弁した。ところが将校は、「お前は嘘を言っている、兵隊からの逃亡兵である」と決め付けたので、私は手真似をしながら弁明し、押し問答しているうち、将校は怒り、皮バンドで尻を数回殴られた。それでも私は鉄道員であると弁解したので、今度は上半身を裸にされ、射殺すると言われ、部屋の隅へ立たされた。将校が腰からピストルを抜くまでは見ていたが、後は私も覚悟をし、目を閉じ無意識に両手を挙げて観念した。そして間もなく将校が「イデシダ」と言い手招きをしたので再び机の前へ行った。また再尋問された後「ダモイ」（帰れ）と言われて、私もやると助かったと大きく呼吸した。早速、脱がされた上衣を着て戸外に出たが、胸の鼓動はしばらく治まらなかった。

兵舎前の大道路に出たのは午後十時ごろだったと思う。その晩は幸いにも晴れて空には無数の星が異様に輝いていた。少し歩いた所で突然、「パンパン、バリバリ」と銃声が聞こえ、その瞬間、「ヒュンヒュン」

と銃弾が頭上をかすめ去った。私はとっさに道路端の灌漑用の側溝へ飛び降りた。ソ連兵が何に向かつて射撃しているのか分からないが、流れ弾に当たり死んだら一大事と思い、側溝をどぶ鼠のようになって歩いた。兵舎から宿舎までは約五百メートルくらいあったと思う。私はこれまで数回兵舎へ使役で往復しており、簡略な地形は分かっていた。途中何組かの兵隊と車両が通ったが、その都度、身を低くし息を殺しやり過ごした。また側溝の中で何回か転び下半身はびしょ濡れになったが、無事宿舎へたどり着くことができた。

宿舎では、ほかの男たちは全員帰っており、私だけが遅くなったので、妻は心配のあまり泣いていた。私だけが貧乏くじを引いたような感はしたが、妻も安堵し、家族全員喜び合い、遅い夕食を共にした。翌日は使役の連絡もなく、一日ゆっくり休養することができた。男狩りから二日後、使役のため大道路に出たとき、先日取調べを受けた兵舎方面からくる日本人男性の一団と出会った。両側には自動小銃の兵が何人も付き、何人か笑顔で手を振って平壤方面に向かったが何か気

になった。後日の情報によると、日本「グモイ」でなく、魔のシベリア送りであったと分かり、あの男狩りの真意が分かった。

このごろから、宿舎地区でも夜間になると、ソ連兵が数人で横行し宿舎に押入り、物品などの強奪事件が続発し、毎晩どこかで被害があった。各宿舎ではまだ明るい時間帯から戸締りを嚴重にし、防空幕を下ろし、外部に灯火が洩れないようにし、全く死の町の感があった。その後、私の宿舎でも何回か被害があった。ある晩は三人の兵が乱入し、男たち全員を部屋の間へ正座させ、一人のソ連兵は男たちにピストルを突き付け、二人は押入れから金品などを強奪して行った。

それから四、五日たって、別のソ連兵三人が乱入し、男たちを一室に閉じ込め、自動小銃を天井に向け乱射した。天井が壊れ木屑や壁土がバラバラと頭上に落下するし、二人は押入れから洋服やオーバーを奪い逃走した。本当に生きた心地がしなかった。それから数日後、また二人のソ連兵が乱入し、押入れの皮トランクから鉄道制服用の襟章を探し出し、兵は持ち主を聞く



ので、私の物であり、鉄道員の襟章であると説明した  
が納得せず、彼らは軍人の勲章だと言い張り、私を部  
隊に連行するというので、私は青くなった。そのとき、  
妻が別トランクから鉄道在職時撮影した写真を取り出  
して見せ、ようやく納得して帰り、連行を免れたこと  
もあった。

このようなことが何回もあり、一ときも心の休まる  
日はなく全く生地獄の世界であった。

私たち四十人は十月初めごろから、ソ連軍経理部洗  
濯工場で常用人夫として働くこととなっていた。そし  
て定職のない人は、十一月末ごろ、日本へ引き揚げさ  
せるため、黄海に面した港町、鎮南浦へ移動させると  
発表した。そのとき、定職のある私たちだけ取り残さ  
れては一大事と思いい行動を共にするよう大反対したが、  
予定通り鎮南浦へ移動し、私たちだけ四十人は取り残  
された。日本への引揚げは全くの嘘であり、実際はソ  
連軍の家族を呼び寄せるため、宿舎を確保する手段で  
欺瞞行為であることが後で分かった。

私の業務は、洗濯作業に必要な蒸気を送るボイラー

の火夫で、ボイラーは立型であった。勤務は二交替勤  
務のため四人おり、うち一人は当時六十歳くらいの方  
で一級機関士の免許所持者であり、現役の機関士であっ  
た。ほかの三人は未経験者なので、約半月ぐらいは投  
炭訓練だけさせられ、何とか投炭し蒸気を揚げること  
ができた。

一方、妻はミシン係として軍服などの修理に従事し  
た。とにかく勤務した以上は帰国まで、お互い励まし  
合い精いっぱい働くこととした。二番方の場合で、月  
夜の晩などは、休憩ときには全員戸外に集まり、澄み  
切った月を眺めながら、故郷を語り合い故郷をしのび、  
そして切ない思いをしたのである。

私たちは、これまで何回となく、日本人会を通して、  
日本への引揚げをソ連当局へ陳情したが許可はなかつ  
た。ついに昭和二十一年の夏となった。八月中旬ごろ、  
私たちだけで、ソ連軍経理部担当責任者である「ミロ  
クノフ少佐」へ帰国許可の請願をしたのである。少佐  
は、お前たちの気持ちは十分理解できるし同情してい  
る。しかし、今すぐ帰すことはできないが、早急に、

朝鮮人の交替要員を確保次第、引揚げを黙認するとの回答を得た。私たちは飛び上がるほど嬉しかった。私たちは早急に会合を開き、引揚げ用の食糧の確保、その他トラックの契約、各自の持参品などの準備をし、待機したのである。

八月三十日、少佐は、明三十一日早朝、秋乙地区から脱出、東京「ダモイ」を宣言したのである。そして、「もし引揚げ途中、危険で行けない場合は帰ってこい、いつでもお前たちを元通り使用するから、途中十分に注意して帰ってくれ、お前たちは長い間本当に良く働いてくれた、ご苦労であった」と言われた。

昭和二十一年八月三十一日未明、見送りにこられた少佐と直接担当の軍曹へ謝意を述べ、先に契約した聞トラックへ総員百三人が乗車し、秋乙地区を出発し、南へ向かったのである。平壤から開城まで約二百キロぐらいあると思うが、トラックは幾分重いエンジンの音を立てながら走った。五分ぐらい走った所に第一検問所があり、保安隊より取調べを受け、所持品の一部を没収され、通行許可を得た。途中何回となくこのよ

うな検問の取調べと、その都度、所持品の没収に遭遇した。約一時間ぐらい走った地点で、運転手から自分もこの先は身の危険を伴うため運転できないから、下車するようお願い渡されたので、運転手に交渉懇願したがどうにもならなかった。そこで、私たちも困り、付近の民家から牛車を雇い入れることとし、幸いにも牛車二台の確保ができた。一台には子供、老人、一台には全員の所持品を乗せ、それ以外の人は徒歩で行くこととなった。

南下の途中、部落では朝鮮人の子供たちから「日本人の馬鹿野郎」と罵声を浴びせられ、小石を投げ付けられる行為を受けたが、大の男たちも後の仕返しを恐ろしく、何も抵抗はできなかった。これも敗戦国の惨めさ、残念さかと痛切に感じたのである。牛車の雇入れも後わずか一日だけで、後日からできなかった。その後、私たちの一行は、降っても照っても、強風雨の日もただ黙々と徒歩行進を続け、日没には橋の下で、又は畑の中や教会などの軒下に野宿をしながら、一路、三十八度線を目指し行進を続けたのである。こ

の行程の途中、朝鮮人の青年たちから建国資金の強要が二回あったと思う。このような状況下で、いつ、いかなる事態が発生するやも計り知れず、毎日不安と恐怖におののいた。

ようやく、目指す三十八度線近くにたどり着いた。

ここは小高い丘の下であり、最後の検問所で保安隊員は倍近くおり、一方ソ連兵は真っ裸で陣地構築をしていた。

国境の三十八度線は、丘を越えて降りたところにある小川が、三十八度線であることが分かった。この検問所では徹底的に嚴重な所持品の検査があり、今まで隠し通した金品はもちろんのこと、手帳から写真、メモした物までも没収された。不届き千万の奴らだ、再び平壤へ逆戻りさせると脅かされた。私の残った所持品は、これまでの道中で御飯を炊いた鍋一個、水筒二個、子供のおしめ数枚と隠し通したわずかの日本円だけとなった。一行は平身低頭し、ようやく通行許可を得た。

私たちがこれまで夢にまで見た三十八度線を越えた

のは、その日も大分暮れかかったころであった。

魔の国境を、幸い全員無事脱出したときは皆嬉しくて手を握り合い、嬉し涙を流し喜び合ったものである。国境から数百メートルの所に、日本人会の世話役の方が出迎えてくださり、私たちの無事脱出を祝福していただいた。約三十分ぐらい歩いた所に、日本人会の借り受けた休憩所があり、ひとまずここで夕食と休憩をすることとなった。数時間休憩の後、收容所のある開城市へ向かったのである。

私たちは、魔の三十八度線を越した安堵で一度に、どっと疲労感が出て、歩行するのがとてもつらかった。これは私だけでなく全員同様であったと思う。

私は長女を背負い、妻は二十年春に出生した長男を背負い、手には軽くなったリュックサックを持ち、牛歩のように歩いたが、子守バンドが両肩に食い込むように痛く、とてもつらい思いが今でも残っている。私以上に、妻も苦痛だったと思う。先導された日本人会の方から、向こうのたくさん電灯の見える所が開城市ですから皆さん元気を出してと励まされたが、私たち

にとつては長い長い道のりであった。

ようやくにして、午前一時ごろだと思ふ時刻に収容所へ辿り着き、重荷を下ろした。平壤の秋乙地区を脱出して、六日目によく開城入りしたのである。

この収容所には検疫のため、八日間収容されるとのことであった。そのとき、収容所には既に数百人の収容者がいたと思う。八日間の期間中、病氣、栄養失調、その他で、死亡者が毎日何人かであった。翌日には米軍のトラックがきて、その死骸をどこかへ運んで行った。

私はこの哀れな状況を見ながら、自分自身もいつ、こんな立場にならないとも限らないと思うと、思わず背筋が寒くなる思いがした。

収容所の食事は、健康体の人には毎食「トウモロコシ」のゆでたものが茶碗に八分目ぐらいで、病人はお粥であった。このため下痢患者がものすごく多く、私も妻も下痢に苦しみ難儀した。

収容所でも我々の一行は、一人の事故もなく収容期間が終わり、いよいよ引揚げ列車に乗車のため開城駅へ向かったが足取りは軽かった。開城駅から貨物有蓋

車に乗せられ、米軍の乗車警備のもと、列車は一路釜山駅へと走った。釜山駅に着いたのは確か九月十四日だったと思う。当日は、釜山棧橋埠頭の税関倉庫のよな所へ宿泊させられた。

翌日は、米国の貨物船「リバティー型」に乗船し同日の夜、九州博多港沖へ到着したのである。ようやく祖国の博多へ到着したのに、また検疫のため、すぐ上陸できず、船内へ留置させられた。私たちは毎日船底から甲板にはい上がり、甲板から手の届くように見える博多市街を見て上陸ができず残念無念でならなかった。

幸い、船の缶詰生活も無事終わり、待ちに待った上陸の日が来た。

それは昭和二十一年九月二十二日であり、今でもはっきり記憶している。私たちは甲板で歓声を挙げたのである。

上陸が完了したのは、多分午前十一時ごろであったと思う。棧橋まで援護局の係官、婦人会の方、その他関係機関の方々の温かい出迎えを受け、一人一人にこ

苦勞さんと勞らわれたときには、思わず涙を流したのである。そして一人一人に心のこもったお握りが配給されたときは、だれ一人として泣かない者がいなかった。私も妻も感激し、大粒の涙で濡れていたのである。その夜は援護局の宿舎に泊まり、翌二十三日の早朝、これまで長期間苦難と生死を共にした同僚と別れ、それぞれ懐かしの故郷へと向かった。

私たち親子は、二十四日夕刻、夢にまで見た故郷の遊佐町へとたどり着いた。

終戦後一年以上、生死不明の親子四人が突然、無事帰宅したので、生家では吃驚仰天したのである。また、妻の生家にも使いを走らせ、妻の生家でも驚き、私の生家へ駆けつけてくれた。その晩生家では祝膳を作り、私たちの無事を祝ってくれた。

私は、その夜から何の恐怖もなく、安眠できた。翌日から二日間ぐらいは親類・知人に挨拶回りなどで過ごしてしまった。

帰国はして見たものの、今後の家族の生活について、心配と不安で心が揺れ動いた。兄夫婦は、当分ゆっくり

り休養するよう優しく言ってくれたが、二十七日ごろから酒田市方面に職探しに歩いた。足を棒にして探したが一向に職がなく、重い足取りで帰宅した。二十九日、遠い親類の世話でようやく職にありつくことが決まり勇躍帰宅した。

勤務先は運輸省の出先機関で、当時の名称は運輸省第一港湾建設部酒田港工事事務所の日雇人夫で働くこととなった（後に官制改正で、運輸省第一港湾建設局酒田港工事事務所と改称された）。

昭和二十一年九月三十日から出勤し、人生行路の再出発の記念すべき日となったのである。勤務場所は工事現場を監督する事務所で当時役所では見張所と称していた。勤務内容は事務室、便所、倉庫などの清掃から始まり、冬季期間の燃料の薪割り、それに水道施設が無かったので、約二百メートルくらいの所にある建設省酒田工事事務所からの水運搬と事務所、各見張所間の書類送致などが主務であり、多忙な毎日を経過した。桶を天秤棒で担ぎ、二百メートルくらいの所からの水運搬は、特に強風の多い海岸では非常に苦勞も

あつたが、耐え忍び頑張り通したのである。

戦時中、日本の各港湾も米軍機の攻撃により船舶、港湾施設が甚大なる被害を受けたことは、私も引揚げ前に知っており、また酒田港もその例外ではなかった。米軍機の爆撃により港湾施設と、当所所属の浚渫船が大被害を受け沈没し、その他の船舶も多数沈没し、港内至る所に船腹をさらけ出した船舶が何隻もあつた。

このため私の就職した当時は、港湾整備が大分遅れていたと思われた。その後、運輸省の関係機関と山形県が一体となり、全力を集中、酒田港の港湾整備促進に取り組んだのである。

昭和四十五年に、酒田北港建設に着手し、四十九年に開港の運びとなつたのである。現今では、酒田本港、北港とも、港湾諸施設が拡充され、大型船舶の出入りが頻繁となり、日本海沿岸有数の重要港湾としての機能を十分果たしているとともに、山形県の海の玄関口として県内の発展に大きく寄与しているのである。

私は、昭和二十三年十一月に傭人の辞令を受け、後に技術員、事務員、運輸事務官に昇任し、主として庶

務、経理事務に携わることとなり、一度運輸省第一港湾建設局へ転任、局管内事務所の統括事務を体験できたことは私にとっては何より幸いと思つている。

昭和五十三年四月一日、本職を退職した。

退職後、長い公務員生活から解放され、七泊八日間の北海道旅行をし、大いに大陸の雰囲気を楽しんだ。

### 【執筆者の横顔】

佐藤寅蔵氏は大正三年四月、山形県遊佐町の農家に生まれ、昭和四年地元の遊佐町尋常高等小学校を卒業後、家業の農作業の手伝いをしていたが、在学当時から他の就職を希望していた。

当時、日本経済は大不況で最悪の状況であり就職できず、毎日悶々として日を過ごしていた。

昭和十年、数年前から朝鮮総督府へ出向中の恩師が帰省されたので、同級生で歓迎会を催した。そのとき、恩師へ鉄道員への志望を打ち明け、翌年二月、現在の北朝鮮へ渡つた。

同年三月初め、朝鮮総督府鉄道局職員採用試験を受

験、合格し、同月末慈山駅へ日給一円十銭で駅手として採用された。数年後、雇員試験、車掌試験などに、合格し、平壤列車区順安駅に勤務し、鉄道業務に精励したのである。

昭和二十年八月、終戦後は幾多の身の危険に遭遇したが、一年間ソ連軍の労務作業に従事し、二十一年九月、引揚げ途中多くの苦難を乗り越えて、懐かしの故郷へたどり着いた。

引揚げ後は幸いにも、運輸省の出先機関へ日雇労働者として採用された後に、傭人、雇員、事務官へ昇任し、酒田、新潟と勤務して、昭和五十三年四月、三十三年度の公務員生活に別れを告げたのである。

退職後、五十四年十月から遊佐町選挙管理委員会委員に選任され、在任中委員長へ選出され、町行政の一機関の責任者として重責を痛感し、粉骨碎身職務に精励したのである。誠意を持って勤務する態度は広く信望をあつめている。

(前引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

## 北鮮脱出記

埼玉県 嵐末 稔

### 一、生い立ちの記

#### (一) 大連での出生

私の父はシベリア出兵、第一次世界大戦と青春時代のほとんどを、中国及びシベリアにおける軍務に服し、除隊後も夢を滿蒙の地に託し、昭和の初め以来、関東州大連市（現在の中国東北部の大連）に居住し、満州国建国のために微力ながら尽くしていたようである。どのような組織に所属していたかは父の口から聞いたことはないが、当時、満州の地方に点在していた馬賊の帰順工作に従事していたようである。私は昭和三年十一月に大連市久方町で生まれ、小学校は朝日小学校、次いで南山麓小学校で三年生の一学期まで学んだ。小学校にあがる前ごろ、月に数度帰宅する父から、土産話に帰順させた馬賊の話をししばしば聞かされた。